日本文学研究資料新集 18

# 谷崎潤一郎

## 物語の方法

千葉俊二 編

有精堂

ISBN4-640-32528-2

——日本文学研究資料新集——

18 谷崎潤一郎・物語の方法

1990年1月10日　初版発行

編者　千葉俊二

発行者　山崎　誠

発行所　有精堂出版株式会社

〒101 東京都千代田区神田神保町1-39
電話 03(291) 1521 (代)
振替口座　東京 9-40684

Printed in Japan　ISBN4-640-30967-8　C3393

## 『日本文学研究資料新集』（全三十巻）刊行に際して

日本文学の研究は、戦後四十余年を経て、隆盛に向かうかたわら、再検討と新しい方法への模索が様々に試みられております。情報化時代といわれる現在の状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。小社ではそうした要請に答えて、『日本文学研究資料叢書』（全百巻）を刊行して、学界ならびに各方面から多大の御好評をいただきました。

右叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効に提供することを目標としたものです。こうした趣旨を継承しつつ、小社は新たにテーマ中心の論集として『日本文学研究資料新集』を刊行いたします。本集では各巻ごとにテーマを掲げ、より深く研究対象を掘り下げて、今後の研究の進路を導く羅針盤ともなることを切に念願しております。

今や国文学界においても、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、情報の氾濫が真の学問的交流の支障をきたすかのごとくになっているようにさえ見えます。そうした錯綜の上に、尨大な著作・雑誌・紀要等が続々刊行され、それらのうちのいくつかは、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったような、種々の困難が重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした状況の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本集は効果的な役割を果たす決意で新たに刊行されるものです。

日本文学の研究者、特に未来に伸びようとする若い研究者に、本集の趣旨が理解され、支持されて、永続的な事業として継続刊行されていく力を与えて下さるように願ってやみません。

有精堂出版株式会社

目　次　▩谷崎潤一郎・物語の方法

好色文学論・・・福田恆存・1
神童の明察・・・田中美代子・13
——谷崎潤一郎——
催眠術師と手品師・・・堀切直人・25
都市の中の身体／身体の中の都市・・・小森陽一・41
◇
谷崎潤一郎の初期作品・・・石割透・55
——この劇的なるもの——
「刺青」・・・岩佐壮四郎・72
——〈宿命の女（ファム・ファタル）〉の誕生——
金色（こんじき）と闇との間・・・清水良典・90
——谷崎潤一郎「金色の死」をめぐって——
「小さな王国」論・・・小林幸夫・101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

——二人の〈しやうきち〉——
大正から昭和への谷崎潤一郎・・・千葉俊二・115
——『青塚氏の話』を中心に——
痴人の愛・・・永栄啓伸・128
——追憶の「お伽噺の家」——
『吉野葛』論・・・高桑法子・140
——言語的歩行者の語りとして——
谷崎潤一郎「蘆刈」「夢の浮橋」など・・・宮内淳子・150
——動かない水の周辺——
レトリックとしての通俗性・・・野口武彦・158
——谷崎潤一郎『武州公秘話』の場合——
語りの戯れ・・・佐伯彰一・169
「細雪」試論・・・東郷克美・188
——妙子の物語あるいは病気の意味——
やまとごころと『細雪』・・・長谷川三千子・198
『夢の浮橋』覚書・・・塩崎文雄・218

——谷崎潤一郎の語りの圏域——
「瘋癲老人日記」論・・・前田久徳・233
——作品の論理と作家の夢想——
◇
解　説・・・千葉俊二・248
参考文献・・・千葉俊二・258
◇
執筆者一覧・・・263

# 好色文学論

福田恆存

## 1　猥本とはどんなものか

結論を先にいつてしまへば、「鍵」は春本であります。石川さんは「それ見ろ」といふかもしれませんが、ここに「春本とはなにか」といふ定義が問題になります。すなはち、春本は文学たりえぬかどうか、また、それが文学たりえるとすれば、その文学としての春本と「芸術の自由」との関係はどうなるか、そこに問題があります。が、それは後廻しにして、まづ最初に「鍵」がなにゆゑに春本であるか、さらに、それがいかなる性質の春本であるかについて分析してみませう。

「鍵」が春本であるといふとき、私は作者の意図を問題にしてはをりません。私が問題にしてゐるのは効果であります。「鍵」は、ある意味において、巷間ひそかに流布されてゐる猥本などより春本としてはるかに効果的であり、はるかに高級であります。あるいは、これ以上、高級にして効果的な春本はありえぬといつてよいかもしれません。いふまでもなく、春本は読者に春情を催させるものであります。性的刺戟を与へるものであります。「鍵」はその点において「高級なる効果」をもつてをり、その効果のために、これ以上に手のこんだ方法はあるまいと思はれるやうに書かれてゐる。どうして、さういふ効果を生じるものとなつたか、それははなはだいひにくいことですが、思ひきつて書いてみることにしませう。

第一に注意していただきたいことは、性慾そのものは春本の材料にはならないといふことです。前提として性慾がなければならない。が、それは必要なる条件であつて、充分なる条件ではない。旺盛なる性慾の描写だけでは、いい春本は書けません。もちろん、性的に未熟な、あるいは未経験な若い時代においては、相手の慾望を無視した一方的な性慾の発現だけで、充分に性的刺戟を受けるかもしれません。が、性慾はあくまで相対的なものであつて、かならずしも金銭のやうに、「無い袖は振れぬ」といふ機械的な

ものではない。相手次第で、その「無い袖」が振れるのです。相手の慾望を知ることによつて、結構、こちらの慾望も誘ひだされるのです。この「相手の慾望を知る」といふ点において、性慾は、ふつう考へられてゐる以上に、生理的であるよりは心理的であり、衝動的であるよりは意識的であるといへる面があるのです。

世にいふ猥本はその間の事情をこころえてをります。ですから、そこでは、女は積極的に自己の性慾の満足を要求するものとして描かれる。なぜなら、「猥褻文書」の作者も読者も主として男だからです。男は自分を求める女の生理的、衝動的な性慾を、眼の前に見たいのであり、それを見ることによつて、自分の性慾が刺戟され、満されるのです。相手の性慾の生理的な要求と満足とを眼前に見たいといふ心理的な慾望は、もちろん男女両性に備つたものでせうが、どちらかといへば、それは男のものです。すべてにおいて、女のはうが生理的、衝動的であり、男のはうが心理的、意識的であるといへませう。また、あへていへば、中年のはうが青年よりも、性慾において、より心理的、意識的であるといへませう。

それはさておき、女の性慾があまり心理的、意識的でないといふことは、女が猥本をさほど読みたがらぬといふ事実のうちにも現れてをります。猥本といふものは、元来が男のためのものであります。男はそれを読むことによつて、実際の異性との交渉におけるより以上に、いや、厳密にいへば、異性との性行為とは異つた性質の快楽を求めてゐるのです。それは性慾における心理的、意識的なるものの純粋化といふことであります。が、この種の純粋化の過程を辿つていけば、究極には自慰あるのみです。現代流行の性医学は自慰の無害を説いてゐますが、それは浅薄にも同じ性慾の満足といふことで異性との性行為と自慰と、両者における快楽の別を看過してゐるのです。自慰が戒むべきであるのは、それが過度にわたつて、生理的に害を及ぼすからでも、神経衰弱になるからでもない。人をして、性慾の心理的、意識的追求に陥らしめ、真の性交とは異つた快楽を、極端にいへば、異性を必要としない、あるいは異性によつて得られない快楽を教へ、それに耽溺するやうにしむけるからです。それは他人との結びつきを断ち切り、自分ひとりですませる、あるいは自分ひとりのはうがいいといつた性質の快楽です。

自慰の快楽は、また「のぞき」の快楽に道を通じてをります。自慰は空想を対象とするものであり、その空想が現実化したものが「のぞき」にすぎません。やはり、性慾の心理的、意識的な側面が極端に助長されたものといへませう。そして、猥本はこの「のぞき」の趣味を満足させるものなのであります。女は猥本を読みたがらない。が、ある種の男は自分が猥本を読むばかりでなく、それを女に読ませたがる。性慾の意識化を楽しまうとすれば、どうしてもさうなるのです。さういふ男は、猥本を通じて、あるいは実際に、相手の女に自慰と「のぞき」を強制しがちであります。いや、どの男にも、多かれ少かれ、さういふ傾向があるやうです。しかし、女が実際にさうなつたら危険だ。猥本を読みたがるやうな女には注意しなければいけない。男女が両方とも意識的になつたら大変です。いづれも意識の主体にならうとして、客体

がおるすになつてきては困ります。

その証拠に、性行為そのものを客体化して、それを見る意識の快楽といふことを相手に求める男でも、もし女がそれに耽りだし、自分の生理的、衝動的な快感をおるすにしはじめたなら、どうにも味気ないものを感じるにちがひない。男は自分の意識の食ふべき客体を失つてしまふからです。相手の生理的な快感を見て楽しまうとしてゐた男は、予期に反して、自分の生理的快感を見て楽しまうとしてゐる女を、眼のまへに見てしまふのです。そこで、男は、やはり女は見られるものであつてくれたはうがいいと思ふやうになる。

たとへていへば、男は、玩具の秘密を知らうとして、それを毀してしまふ子供のやうなものです。男は女にたいして、毀しても毀しても、その先に秘密があるやうな玩具があることを欲します。のみならず、その玩具自体が、それを毀す男の手を手つだつてくれることを望みます。ずいぶん贅沢なものですが、さらに贅沢なことには、女が、その男の手を手つだひながら、手つだつてゐる自分を意識せず、また、自分を解きほごさうとしてゐる男の意図にさへ気づかずにゐることを欲してゐるのです。

まことに贅沢な話でありますが、男女に程度の差はありますものの、性の機微といふものはその辺にあるのではないでせうか。

## 2　「鍵」の分析

さて、問題の「鍵」でありますが、この作品はさういふ性の在りかたを、じつに巧みにこころえてをります。まづ最初に、妻の郁子は性慾の強い女として規定されてをります。「淫蕩」で「稀ニシカナイ器具ノ所有者」となつてゐます。同時に「身嗜ミ」のよい、「偽善的ナ『女ラシサ』」を備へた女であります。つまり、秘めることを知つてゐるのです。しかも、さういふ妻に対置された夫は、性慾の衰へかけた年齢に属し、性を露出化することに楽しみをかけてゐる男として描かれています。割り切つていへば、極端な生理派と極端な意識派との役割を、女と男とにふりわけてゐるのです。女の生理的な性慾の実態を見ようとする男の意識にとつて、相手のはうが性的に自分を凌駕してゐるといふ実感がたえず必要であるからです。

いひかへれば、妻が自分だけでは事たりず、自分以外の、しかも若い男を欲してゐたはうが、意識的性慾の満足感が得られるのです。したがつて、この作品の主人公が、あるいは作者が意識してゐるやうに、その若い男の木村はたんなる「刺戟剤」ではない。もし「刺戟剤」であるとすれば、主人公の夫にとつてのそれでなく、妻にとつてのそれだといへませう。木村は妻の性慾の強さを知るための媒介物なのです。しかし、妻が強い性慾の持主であるだけでは、この夫は満足しない。そのことを妻自身に自覚してもらひたいのです。妻が自分の「器具」に自覚してほしいのです。夫の日記の第一の目的は、その自覚を妻に強ひることにあります。そして、木村といふ若い男も、その自覚を妻に強ひるための存在にすぎません。

ですから、主人公が、妻がそれを自覚したときの恐しさとか、木村への嫉妬とか書いてゐても、それは主人公の心理として大し

た実感を与へないのです。嫉妬といふ情熱は倫理的なものです。が、「鍵」には倫理的な要素は全然ないといつてもいい。あるのは性心理だけです。それも自慰におけるものであつて、対人関係はぜんぜんない。中村光夫さんが「操り人形」みたいだといふのも、そこに理由があるし、伊藤整さんが夫妻の日記の別を認めず、妻の日記に「作者その人が乗り出してゐる感」をいだいたのも、そのためです。自慰はひとりずまふの楽しみでしかありません。また、ひとりずまふの楽しみのためには、他人を一個の人格として取扱ふことはまづいので、つねに物として自己の快楽に利用するのです。物に嫉妬は感じません。

主人公は、妻が木村との関係で「随分キハドイ所マデ行ツテヨイ」と書いてをりますが、それは、いひかへれば、「どこまで行つてもよい」といふことであり、「最後の線をも乗り超えてしまつたはうがよい」といふことであります。そのことをもうすこし分析すると、かういふことになります。妻は木村を物として利用してゐなければならず、また妻は自分を物として木村に与へるのでなければならないといふことです。妻が木村に与へるものが物である以上、夫はなにものも失はないといふわけです。それどころか、物としての木村を妻が所有することによつて、夫は得るだけの話であります。その範囲内では、妻が「どこまで行つてもよい」のです。主人公も作者も、そこまで自己を分析してゐないから、「随分キハドイ所マデ行ツテヨイ」といふ表現にとどまつたのであり、実在しもしない嫉妬といふ感情を弄んでゐることになつたのであります。

妻が自己の性を物として扱ふことを要求するといふのは、前にも述べたやうに、女もまた男の意識的な性慾の主体性を分け担ふことを要求することです。そのために夫は自分の日記を妻に見せたがるのですが、同時に、夫は妻があくまで無意識の生理的性慾といふ実体を保持することを求めてゐます。さういふ夫の心理は、妻がブランデーを飲んで意識を失ふところに、よく現れてゐます。主人公はかう書いてゐる——「フト僕ハ、妻ハホンタウニ寝テヰルノデハナイ、タシカニ寝タフリヲシテヰルノニ違ヒナイト思ハレテ来タ。彼女ハ最初ハホンタウニ寝テヰタラシイガ、途中カラ眼ガ覚メタノダ。覚メタケレドモ事ノ意外ニ驚キ呆レ、余リニ羞カシイ恰好ヲシテヰルノデ、寝タフリヲシテ通サウトシテヰルノダ。」なほ主人公は、妻がすべてを意識してゐて、しかも知らぬふりをしてゐることが「僕ニタマラナイ愉悦ヲ与ヘタ」と書いてゐます。

のみならず、途中で、妻が眠をさましたらしい動きを見せると、夫は、一時、電気を消して、ロうつしに睡眠剤を飲ませてやります。なぜ、そんなことをしたかといふと、「ソノクラヰノ分量ヲ服シテモ利カナイヽハ利キハシナイ。僕ハ必ズシモ睡ラセルノガ目的デ飲マシタノデハナイ。彼女ガ睡ル真似ヲスルノニ都合ガヨカラウト思ツテ飲マシテヤツタノデアル」と書いてをります。そのことは、女が自己の衝動的性慾を保持しつつ、同時に意識者として男に手を貸し、その意識的性慾を分担してもらひたいといふ男の心理にとつて、もつとも好都合であるといへませう。酒と睡眠剤とによつて、女は意識者と無意識者の役割を兼ね備へるから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

です。男のひとりずまふに女も協力してゐるからです。妙なことですが、これが純粋にひとりずまふだつたら、男はおもしろくない。ひとりずまふでありながら、男は協力を求めてゐるのであり、協力を欲しながら、ひとりずまふの領域にとどまらせておいてくれることを望んでゐるといふわけです。

読者は、右の引用箇所まで来なくても「鍵」がさういふ効果をもつた作品であることを、暗々のうちに察するでせう。主人公と一緒に、女がすべてを意識してゐて、しかも知らぬふりをしてゐるのだといふことに気づくでせう。すくなくとも、それを望むでせう。じじつさうであることは、夫の死後の妻の日記によつて明されます。郁子は夫に自由になりながら、譫言のやうに「木村さん」といふ言葉を洩らすのですが、この若い男の名を口走つたのを、郁子は「朦朧とした意識の底で感じてゐた」と書いてをります。

それば かりではありません。妻の日記にはかうあります――「卅日の夜の場合は違ふ。あの夜は私は明かに或る目的を以て寝た振りをし、譫語のやうに見せかけてあの言葉を云つた。はつきりした意図と計画に基いてゐたとまでは云ひ難いが、――矢張幾分は寝惚けてゐたかも知れないが、――寝惚けてゐるのを意識しながら、良心を麻痺させるのにそれを利用した。」そしてなぜさういつたかといふと、「あの譫語には、『木村サントコンナ風ニナツタラナア』と云ふ気持と、『夫があの人を私に世話してくれたらなあ』と云ふ気持と、二つの願望が籠つてゐたに違ひなく、それを分つて貰ふためにあの言葉を云つた」とあります。

が、これは半分は本当で、半分は嘘です。あるいは、この嘘には作者の谷崎さんも気づいてゐないかもしれない。なぜ、それが嘘だと断定するかといふと、作品の効果のうへで、この譫言は本人の「二つの願望」以上の役割を演じてゐるからです。それはなにかといへば、さきにいつた男の意識的性慾への協力であります。この譫言は夫のいふ「嫉妬」を通じて夫を喜ばせるものであり、さういふ効果をもつてゐることを、妻も無意識のうちに感じてゐるのです。そして誰よりも、読者にその効果が与へられてゐるのであります。夫の日記における「嫉妬」と同様、妻の日記の「二つの願望」は、さしたる実感を与へぬゆゑんです。

ところで、かうした自慰にまで堕した意識的性慾の在りかたは、この作品の構成によく現れてをります。夫と妻とはたがひに隠れて日記をつけてゐる。もちろん、さういふ小説は珍しくありません。が、「鍵」においては、隠れて書かれた日記が、両方に読まれてしまつてゐる。もつとも、それさへ珍しくないといへるかもしれません。が、「鍵」のばあひ、おたがひがその日記を読みあつてゐることを、相手に知らさないばかりでなく、おたがひにそれを知りたがらないのであります。夫妻ともに、自分の日記を相手に読ませたがりながら、読んだあとでは、読まなかつた仮定のもとにふるまつてもらひたがつてゐるのです。私が手がこんでゐるといふのは、その点です。

その間の心理は、ことに妻の日記にはつきり現れてをります。妻はかう書いてゐる――「直接には耻かしくて云へないことも、この方法でなら云へる。しかしくれ〴〵も、夫が内証で読むこと

は仕方がないとして、決して読んだと云ふことを露骨に云はないで貰ひたい。尤も彼は読んでも読まない振りをする人だから、そんなことを断る必要はないかも知れない。次に、夫はどうであらうとも、私は決して夫の日記帳を読んでゐないことを信じて欲しい。」さらに妻は夫の死後の日記に、次のやうに書いてゐます――「私が盗み読みをしてゐることを夫に秘してゐたのは、生来『知ツテイルコトデモ知ラナイ風ヲ装』ふのが好きであるためばかりではない。盗み読んでは貰ひたいのだが、読んでも読まない風をしてゐてくれるやうにと云ふのが、恐らくは夫の注文であるらしいことも察してゐたからである。」

さらに終りのはうに、妻はかう書いてゐます――「夫は二月廿七日に、『ヤツパリ推察通リダツタ。妻ハ日記ヲツケテキタノダ』と云ひ、『数日前ニウスウス気ガ付イタ』と云つてゐるけれども、実際は余程前からハツキリと知つてをり、且内容を盗み読みしてゐたものと思ふ。私も亦、『自分が日記をつけてゐることを夫に感づかれるやうなヘマはやらない』――『私のやうに心を他人に語らない者は、せめて自分自身に向つて語つて聞かせる必要がある』――などと云つてゐるのは、真赤な嘘である。私は夫に、私には内証で読んで貰ふことを欲してゐた。」

夫は夫で、「中ヲ開イテハ見タケレドモ、文字ハ一字モ読ミハシナイ。アンナ細字デ書イテアルモノヲ近眼ノ僕ガ読ムノハツライ。ソレハ信ジテ貰ヒタイ。尤モ、僕ガ読マナイト云ヘバ云フホド反対ニ『読ンダ』ト思フノガ彼女ナノダ。読マナイデモ読ンダト思ハレルクライナラ読ンダ方ガヨイヤウナモノダガ、ソレデモ僕ハ断ジテ読マナイ」と書いてをります。一口でいへば、夫婦で「隠れん坊」に興じてゐるやうなものです。しかも、二人とも、その「隠れん坊」を遊戯の虚偽性から救ひ、それに迫真的な実在性を与へるために、それぞれ相手の意識にたいして眼かくしするのです。相手のすべてを見、見ることによる快楽をものにしようとしながら、相手の自分を見る眼にだけは気づくまいとするのです。「鍵」における夫婦二人の日記の並列は、そのために必要な措置だつたといへませう。

それはなにか完璧な犯罪のにほひがします。二人の人間が一つの犯罪を遂行するばあひ、たがひに相手の意図や手段を充分に知りつくしてゐたはうがいいと同時に、そのことがまた、つねに共犯といふことを難しいものにしてゐるのです。意識が一つで、物として利用しうる体が二つ三つと多くなるのが、一番好都合です。人は意識が一つであるかぎり、利害の対立を起さぬばかりでなく、相手に自分の犯罪を見られてゐることから生じる恐れからまぬかれることができ、どんなことでもやつてのけられませう。「夫の注文」どほり動きながら、それでゐて「夫の注文」を知つてゐる自分の意識を夫に見せない「鍵」の妻は、夫の「共犯者」であるといへるのです。この夫妻は暗黙のうちに、相手の「犯罪」を教唆し奨励し、たがひに力を貸しあひながら、その相手の「犯罪」を見て見ぬふりをしてゐるのです。もちろん、相手をいたはるためではなく、自分の快楽を増大するために。

そのことがなにを意味するか、いよいよひにくいことをいはねばならぬはめになりました。思ひきつて、いひませう。「鍵」

の夫婦は、おたがひに「のぞき」をやつてゐるのです。見られてゐるのは、物としてのそれぞれの下半身であり、見てゐるのは、それぞれの眼としての意識であります。しかも、二人の眼は、その間に壁があつて、たがひに見入られぬ仕掛けになつてゐる。ここまでいへば、「鍵」がいかに巧緻をきはめた春本であるかは明らかであると思ひます。もちろん、それがそこらにある猥本と類を異にするものであることは、いふまでもありません。その理由は、そこまで純粋で巧緻をきはめてゐるといふこと、また、文章も構成も、あくまで乾いてゐるので、読者に性的刺戟は与へても、けつして石川さんのいふやうな「不潔な」猥雑感を与へぬことなどでありませうが、その底には、もつと本質的な理由があるのです。それについて、さらに考へてみませう。

## 3　作者の意図

右に述べたやうな「鍵」の春本的性格、すなはち自慰と「のぞき」に到達する好色性といふものは、作者の谷崎さんにおいては、かなり本質的なもののやうに思へます。多くの評者は初期の谷崎潤一郎に、油つこい西欧的なセンシュアリズムを見ますが、これは誤りであります。もちろん、この過ちは、評者ばかりでなく、作者自身が犯した自己解釈の錯誤でもありませう。当時のかれは、西欧的なセンシュアリズムをもつて、かびくさい自然主義文学の精神主義に反旗をひるがへしたと思つてゐたのに相違ない。

が、いふまでもなく、日本の自然主義そのものが、その西欧主義をもつて硯友社文学を否定したといふ、やはり同様の自己解釈の錯誤を犯してゐたのです。その自然主義文学が、その外装にもかかはらず、本質において日本的であり、それゆえに西欧化の姿勢においては、あくまで観念的であつたのとおなじやうに、谷崎のセンシュアリズムは、自他ともに西欧的だと思ひこんだ面においては、はなはだ観念的な様相を呈し、その本体はあくまで日本的だつたといへるのです。一口にいへば、谷崎さんのうちには、江戸期の好色文学を成りたたしめた性の遊戯化といふ傾向があるのです。西欧的なセンシュアリズムは、それを押しだすために採りあげた口実にすぎません。たまたま世紀末のデカデントがその口実をかれに与へ、当時の読者も文壇も、それで納得したといふだけのことです。

一度さういふことに気づけば、「刺青」も「痴人の愛」も、官能的であるどころか、観念的で、とても読めたものではない。が、谷崎さんの作品を時代を追うて読んでいくと、作者がかういふ自己解釈の錯誤から次第に脱皮していく過程が明らかになります。つまり、自己の本領である日本的な好色文学への傾きがはつきりしてまゐります。この観点から見るとき、「鍵」は、石川さんのいふやうな作者の「耄碌現象」ではなく、谷崎潤一郎として来たるべきところへ来たといふものであつて、かれの作品系列中、いはばその頂点を形づくるものといへませう。

その必然性は「春琴抄」とくらべてみれば、一目瞭然であります。佐助は盲目の女主人の愛慾に奉仕するため、自分の眼をつぶしますが、それはただ愛するものと同じ境遇に身を置かうとする人情からでもなければ、また盲目のはうがより官能的な満足がえ

られるからでもありません。作者も読者も、その点、勘ちがひしたかもしれない。が、実際は、「鍵」におけると同様、意識的性慾の追求のためであります。見て見ぬふりをするためであります。ただ、「春琴抄」においては、「鍵」におけるほど、そのことが充分に作者によつて意識されてゐなかつただけの話です。

では、「鍵」においては、それが充分に意識されてゐるか。前章で私が分析したやうなことを作者が意識してゐたかどうか。そこが問題であります。私は、意識してゐなかつたと、いちわう割り切りたい。それはたんに私の希望的観測ではなく、事実さうだつたと思ひます。

初期の谷崎さんが日本特有の好色文学への要求を西欧的な色彩で塗装し、その観念性に気づかなかつたやうに、「鍵」においても、表面、あくまで観念的な主題を押しだしてをります。私はすでに前章において、夫の「嫉妬」だとか、妻の「二つの願望」だとかいふものが、実感に乏しいことを申しておきました。が、それればかりではありません。よく高等学校の国語教育でおこなはれる手口ですが、もしこの作品の「大意」はなにかといはれれば、大抵の人はかう答へるでせう。人形使ひが人形を扱ふごとく、妻を操らうとして、逆に妻に操られた話。もう少し詳しくいへば、夫によつて性慾を目ざめさせられ、さうすることによつて夫を楽しませるやうに教へられた妻が、その域を脱して、他の男を欲するやうになり、つひに夫を殺す話。そしておそらく作者の意図はその辺にあつたものと思はれます。

が、この「作者の意図」といふのが、じつに曲者であります。

「作者の意図」のみではない。これは「性の意識について」において述べたことですが、ある行為をなすばあひ、その本人が意識してゐる動機や意図ほどあてにならぬものはありません。なるほど、世には作者が意図したものだけしか現れない作品といふものがある。が、さういふ作品は、その意図がいかに高級で、善意に満ちたものであつても、文学作品としては低いものであるか、あるいは文学作品といへぬものであるか、そのどちらかであります。「鍵」は、さすがにそんなものではない。だから、私はそれを春本、あるいは好色文学と呼んでも、はつきりこれを猥本と区別してゐるのです。猥本の意図は明らかであります。性慾といふよりは、劣情をくすぐることであり、そしてその意図のみならず、その効果もそれだけのものにすぎません。意図が充分に発揮されてゐるかどうかの違ひこそあれ、そこには意図されたものだけしかない。したがつて、猥本は文学とはいへないのです。

ところで、「鍵」の意図は、春本の制作ではありません。私がそれを春本と呼ぶのは、あくまで効果についてであります。意図は、右に述べたやうに、西欧的な心理主義であります。が、それがあまりに観念的であると、私はいふのです。なぜなら、西欧の心理主義は、いかに自意識の穴の中を這ひずりまはつてゐるときでも、つねに対人関係を基調としてをります。いひかへれば、どこまでいつても、心理は倫理的であることをやめないのです。他人はつねに一つの人格として、私たちの前に存在する。そのことは性においても変りはありません。性的交渉においても、かれらは人格を無視できぬばかりでなく、そこにおいてこそ、もつとも

激しい自我と自我との相剋に追ひやられるのです。

が、谷崎さんにはそれがない。性心理の純粋化はあつても、それは倫理とまつたく関らないのです。「鍵」の夫婦は相手を人格としてではなく、物として取扱つてゐるにすぎないからです。また、自分を物として取扱ふのに都合のいいやうに、自分を相手に提供するのです。それが見て見ぬふりをするといふことでせう。そのために純粋に性が味はへるのであり、性を純粋に味はふために、さうするのであります。したがつて、倫理的な葛藤は起りません。起つても、それにたいしてすら、見て見ぬふりをしてをります。夫婦ばかりではない。木村も敏子も同様です。四人が意識し、協力して、一つの性的快楽の群像を造りあげてゐるだけです。それを作者は、四人とも「陰険」だといつてをりますが、これを「陰険」といふのは西欧的解釈であつて、日本的に考へれば、あるいは、すくなくとも江戸日本的に考へれば、それこそ現世極楽の図であるといへませう。

妻の日記に「二人がどんな風にして愛し合ひ、溺れ合ひ、欺き合ひ、陥れ合ひ、さうして遂に一方が一方に滅ぼされるに至つたか」とありますが、それは西欧的なものの考へかたに、それと知らずに影響された自己解釈にすぎないので、女もまた性の快楽にすなほに耽つてゐたのであります。つまり、悪人ではないのです。この女もまた「善悪の彼岸」にゐる人です。が、困つたことには、あるいは、めでたいことには、作者もまた倫理の彼岸にあつて、春本を造つてゐたといへませう。ただ、かれもまた近代日本の文学者として、西欧文学の框のなかでしか、作品が書けなかつたのです。西欧的な主題を意図としなければ、すなはち江戸期の好色文学制作を意図として表だてたのでは、「鍵」を書く創作慾すら生じなかつたでせう。作品が子供であるとすれば、私たちにとつて、その母は日本人の肉体であり、西欧的な観念は、父の働きをしてゐるといへませう。

## 4　無意識の意図

前章で述べたことを要約すると、「鍵」が読者に与へる効果は春本のそれであつても、作者の意図は「愛し合ひ、溺れ合ひ、欺き合ひ、陥れ合ひ、さうして遂に一方が一方に滅ぼされるに至る」二人の男女の劇を書かうとしたといふことになります。が、それならば、意図と出来ばえとの間にずれがあるといふのか。私はそんなことをいはうとしてゐるのではありません。作品が作者の意図どほりにいかないばあひはいくらもあります。まへにもすでにいつたことでありますが、たとへ意図どほりにいつたとしても、その意図以外のものが盛られてゐない作品は文学作品とはいへません。したがつて、高邁な意図のもとにくだらぬ作品が出来ることもあり、平凡な意図のもとに、あるいは意図などほとんどもたずに、りつぱな作品が出来ることもあります。

もし意図だけでくらべることになると、シェイクスピアやセルバンテスやボッカチオなどは、現代のいかなる群小作家にも及ばないといふことになる。今日のどんな群小作家でも人類や階級や正義や愛のために作品を書くことを知つてゐますが、ルネサンスの天才たちは、貴族や衆愚に媚を売ることしか知らなかつたので

す。せいぜい教会の教理の宣伝役を演じることしか考へなかつたのです。また、バルザックやスタンダールは金や名声のごとき現世的な慾望から、ただおもしろをかしい小説を書かうとしたのだともいへませう。しかも、かれらは群小作家のおよばぬ傑作を書いた。

その差は才能の有無といふことだけで、かたづきませうか。意図と出来栄えとの間のずれといふ技術的な問題からのみ論じられませうか。もちろん、それらのことは無視できません。が、その才能や技術の基底に、さらに本質的な問題が隠れてゐることを見のがしてはならない。それは無意識の意図といふことであります。「人間・この劇的なるもの」にも書いたことですが、シェイクスピアは謀叛人を罰するために、すなはちクリスト教的勧善懲悪を目的として「マクベス」を書いたにもかかはらず、現代の私たちはもちろん、当時の観客も、じつはマクベスの悪に魅力を感じてゐたのです。このばあひ、勧善懲悪は作者の意識した意図であります。そして悪への慾望は作者の無意識の意図であります。作者ばかりでなく、この意識した意図と無意識の意図とは、「マクベス」を見る観客の心理の陰翳をそのまま現してをります。

意図とは、文字どほり、意識した考へを意味するものであつて、無意識の意図といふのはをかしいといふかもしれない。が、私たちは無意識のうちで、意識のおよばぬ的確な計算をする。例をあげるまでもありますまい。近い話が「鍵」の郁子の譫言もそれです。文学作品の深みといふのは、この作者の無意識の意図の深さとその計算の的確さとから生れるものです。石川達三さんの作品をも含めて、ふつう通俗小説といはれるものにはそれがない。作者の意図どほりに書かれ、その計算の的確さも、意識の世界のなかでだけのことにとどまる、だから、出来栄えもよく、出来栄えと意図との間にずれもありません。

が、よくしたもので、天網恢々、さういふ作品においてすら、無意識の意図といふものが、たとへわづかでも認められるのがつねです。「自分の穴の中で」や、「四十八歳の抵抗」などが好例です。これらの作品で作者の意識した意図は、人倫を説き社会悪を剔抉せんとする正義感であつても、無意識の意図は、男心をそそる女の性的魅力によつて四十男の浮気心を刺戟することであります。が、それを無意識の意図といふのは、私の好意的な解釈であることを見おとさないでいただきたい。むしろそれは第二の意図、あるいは真の意図といふべきです。つまり、人倫を説くのは社会人石川達三の意図であり、男女関係のおもしろさで読者を釣るのは、作家石川達三の意図であるといへませう。

ところで、私は、「鍵」の無意識の意図は性慾の刺戟にあるといひたいのですが、それが「四十八歳の抵抗」の第二の意図とどうちがふか。谷崎さんは「鍵」を書くばあひ、それが春本的効果をもつことに無意識であつたはずはない。その効果を知つてゐたとすれば、「やがて」それは、かなりに意識的な意図と「化さず」にはすまないわけです。それなら、石川さんの通俗小説の第二の意図と、どこがちがふかといふことになる。が、両者は根本的に異るものなのです。

石川さんは「東京新聞」(一月三十一日)にかう書いてゐる——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com